

カキ樹幹害虫の新たな防除対策

～難防除害虫を効率的に防除～

1. 背景と目的

奈良県におけるカキ栽培ではヒメコスカシバとフタモンマダラメイガの2種類の樹幹害虫が発生します。両種とも樹皮の下に幼虫が食入して、木くず状の虫糞を出し、枝や樹の衰弱や枯死につながる重要害虫となっています(写真)。

これまでの研究で、本県では越冬幼虫はヒメコスカシバの方が多い(約60%)こと、樹幹部への食入はヒメコスカシバでは6～7月、フタモンマダラメイガでは9～10月に多い傾向にあることがわかりました。



写真 カキ樹幹害虫の幼虫

左：ヒメコスカシバ 右：フタモンマダラメイガ

防除対策としては、粗皮削りやMEP剤の塗布などが行われてきましたが、多大な労力を要するにもかかわらず、十分な防除効果がみられない場合もありました。そこで、近年、チョウ目害虫に卓効を示し、残効性に優れる新規系統剤であるジアミド系剤が開発されたことから、本剤を用いた樹幹害虫の新たな防除対策について検討しました。

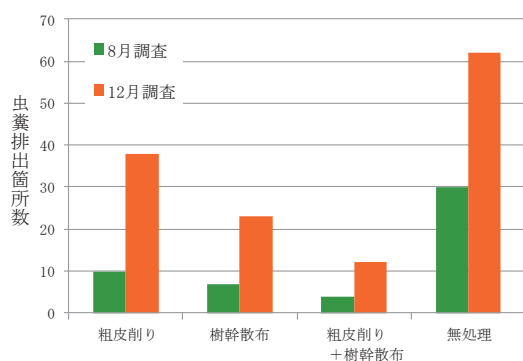


図1 粗皮削りと樹幹散布の防除効果

2. 研究成果の概要

19年生の‘富有’で、粗皮削り、フルベンジアミド水和剤200倍の樹幹散布(4月22日)のそれぞれ単独処理に加え、両方を行う処理区を設けました。粗皮削りや樹幹散布単独処理でも一定の効果が認められましたが、粗皮削りと樹幹散布を組み合わせると効果が高くなりました(図1)。このことから、フルベンジアミド水和剤の効果を最大限に引き出すにはあらかじめ粗皮削りを行うことが重要であることが明らかとなりました。

次に、19年生の‘上西早生’で、フルベンジアミド水和剤4000倍を立木散布(8月2日、9月10日)しました。本処理により、2種の越冬幼虫数も低く抑えることができました(図2)。なお、9月に散布した方が効果がやや高くなりました。

3. 今後の展開

生産現場では老木化した‘富有’を若木の大苗に植え替える改植が行われていますが、その大苗が樹幹害虫の被害を受けて、樹冠拡大が進まない事例が見られます。現在、この被害を回避するために、フルベンジアミド水和剤の樹幹散布と立木散布を組合せた防除効果について検討しています。

(果樹栽培ユニット 杉村輝彦)

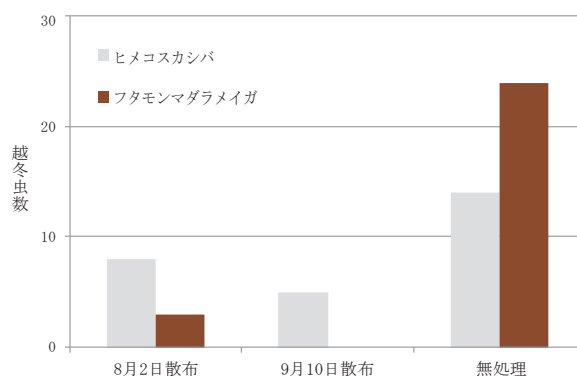


図2 立木散布の防除効果

注) 虫糞排出箇所数および越冬虫数は150箇所あたり